

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0627 ◆◆◆

21/03/17

【 求心力極めて高い 108 円台を中心とした攻防注視 】

先週もレポートしたように、筆者の今年のドル/円年間予想は「中立」もしくは「ドルやや強気」だが、実勢相場はレンジこそやや狭いが「年初安・足もと高」の様相。まだ断定するには早すぎるほど早いものの、このままいけば 2013 年や 2014 年のような「年初安・年末高」という一本調子のドル高進行を否定できない気もしている。

そんなドル/円相場の先行きについて、今回の当レターでは「価格分布帯」の観点から考えてみたい。「求心力が非常に強い」108 円台を中心とした足もとの価格帯を如何に上抜けるのかがポイントとなりそうだ。

◎ 搦めとられてしまうと、今年も「104-113 円台」での一進一退に!?

当レターで過去に何度もレポートしている「取引の価格分布帯」において、過去の取引が多かった価格帯は「居心地の良いレベル」で抜けることは容易でない反面、取引の少なかった価格帯は「居心地が悪いレベル」で、アッサリとスルーしていくような傾向が見受けられる。

さて、当レターにおいて「取引の価格分布帯」の観点において前回レポートしたのは昨年 11 月。詳細はバックナンバーを参考にされたいが、ドル/円が 104 円を割り込んできたタイミングでレポートし、「攻防の分岐点は 103 円台」ーなどと指摘していた。

そして、その後の実勢相場はというと、103 円台を下回ったことはほぼなく、NYクローズベースでいえば今年の年明けに一度達成したきり。やはり、「103 円台」が強いサポートとして寄与した感を否めない。

いずれにしても、ドル/円は前記した年初のドル安値 102 円台、具体的には 102.60 円をボトムに堅調な推移をたどり、先日は 109.36 円の年初来高値を示現している。非常に緩やかながらこここで 2 ヶ月半、価格にして 7 円近くにも及ぶ上昇をたどっている計算だ。

そんななか、市場のセンチメントを日経新聞の報道ベースで振り返ってみると、当初は「円、消えぬ先高観」(1 月 28 日付)と報じられたものが、2 月 25 日付では「需給の円買いに陰り、100 円突破説修正」、さらに 3 月 6 日付では「ドル先高観強まる、年内に 110 円台も」ーなどと、その論調が完全に一変している。つまり、足もとではドル高・円安の継続、さらにいえばいま一段のドル高・円安の進行を予想する声が少ないようだ。

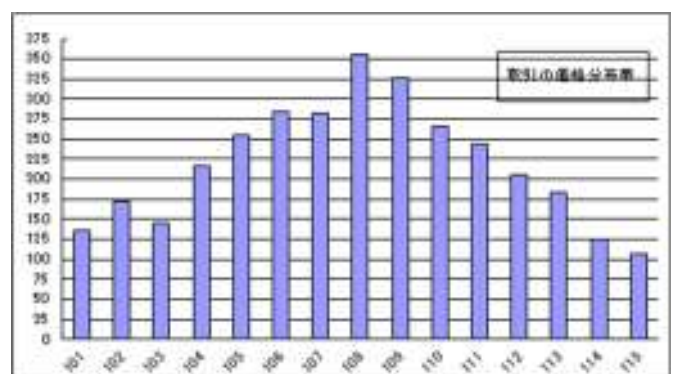
しかし、本当にここからさらなるドル高・円安が進むのだろうか。「価格分布帯」では、こういった見通しになるのだろうか。

本稿執筆時を含め、ここ最近推移している 109 円台は取引日数 300 日を超えるだけでなく、先日まで推移していた最多取引日数(355 日)である 108 円台に次ぐ「極めて求心力が高い価格帯」だ。また、その前後、具体的には 104-113 円台もかなり求心力の高いゾーンになる(詳細は下図参照。横軸が取引価格、縦軸は取引日数)。

飽くまで「価格分布帯」の観点からすると、取引日数が極めて多く、吸着力の高い 108-109 円台を中心に、104-113 円というゾーンを「しっかり」抜けていくことは容易ではないだろう。

上方向の場合、今後仮に 110 円を超えていく展開をたどったとしても、イケイケドンドンでドルが続伸する展開は見込みにくいと言わざるを得ない。一方、逆にどこかでドル高への調整局面があったとしても、下値は堅く、大崩れも予想できないことになる。

改めて指摘するまでもなく、ドル/円は昨年まで 4 年連続の小動きで「今年こそは!」という巻き返しの動



きが期待されているものの、「価格分布帯」における求心力の高さなどを考えると、今年も 108-109 円台を中心としたレンジ取引が予想以上に長期化する可能性を否定できないようだ。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved



FX-newsletter